

国語教育相談室

中学校

no.

61

光村図書

特集

学校図書館を活性化しよう

巻頭
エッセイ

ますます多様化が進む時代に
円満字二郎

教師力
講座

「書くこと」の
学習の前に

教材
の経

「書く」教材の
取り扱い

書写

千七百年の
時を超えて

インフルエンザにかかる

京都教育大学教授
森山卓郎

この一年、いわゆる新型インフルエンザで大変であった。
さて、インフルエンザ、どんな動詞をお使いですか。——「インフルエンザになる？」かかる……」

風邪もインフルエンザも症状は似ているが、病気としては全く違うという。面白いことに動詞も違う。風邪なら「ひく」だけれど、インフルエンザをひくとはあまり言わない。意外に日本語は科学的だ。

病気について使う動詞で最も一般的なものは、「なる」だ。いわば病気を一つの「状態」ととらえ、それへの変化を言うのである。「肺炎、水虫、胃潰瘍、鬱病、がん」「下痢、便秘」など、ほとんどの病気や症状について使える。

「老眼」も使えるし、「元氣」まで「なる」を使う。ただし、「頭痛」「寒気」「めまい」など感覚症状には使わない。

さて、「インフルエンザになる」のインターネット上の使用数を検索で調べると、約三六〇万件だった（文字列のみ。グーグルのフレーズ検索。本年三月）。やはり一番多い。

さて、「患^{わづ}う」はどうだろう。「煩^{わづ}う」と同じ語源で、ちょっと古い言葉でもある。インフルエンザについてはあまり言わないようである。ちなみに「インフルエンザを患^{わづ}う」の検索件数は約二万件あまりであった。

では、最後に「罹^{かか}る」はどうか。典型的には病原性の「病氣」について用いるようで、「下痢、便秘」などの症

状には言わない。「頭痛」などの感覚にも言わない。本来、「わなにかかる」のような、あるものの影響下になるということを表すからだろう。ちなみに「インフルエンザに罹^{かか}る」の検索件数は約三三万件、平仮名表記の場合は約五一万件あまりであった。

ところで、インフルエンザにかかったらどうするか。「お医者さんにかかる」ことになる。なんと、「お医者さん」も「インフルエンザ」も日本語では同類だ！ 助詞の使い方は違うが、「医療費」も「かかる」。そう、病気になるというらいことになる。ご愛読ください。

CONTENTS

探検！言葉の森 10 インフルエンザにかかる 森山卓郎

巻頭エッセイ 言葉と向き合う 02 ますます多様化が進む時代に 円満字二郎

特集 04 学校図書館を活性化しよう

インタビュー／子どもの集まる図書館って
どんなところだろう？ 赤木かん子

実践編／こんな工夫で、図書館が生まれ変わりました
群馬県富岡市立西中学校・愛媛県松山市立北中学校・宮城県仙台市立加茂中学校

生徒と図書館をつなぐために 塩谷京子
「図書館を利用した“調べ学習”のしかた」初級編

教師力講座 9 14 「書くこと」の学習の前に 甲斐利恵子

教材の径 9 18 「書く」教材の取り扱い 松野洋人

書写指導の可能性を探る 1 20 千七百年の時を超えて 内田征志

ますます

多様化が進む 時代に

漢和辞典編集者 円満字二郎

大阪から神戸へ向かって電車に乗ると、しばらくして、進行方向右手に、小さなおわんをひっくり返したような、かわいらしい形をした山が見えてくる。兵庫県西宮市のシンボル、甲山だ。海拔三〇九メートル。そのまあるい形が、なんとも人なつっこいこの山を目にするたびに、ぼくは「帰ってきたなあ」と感じる。

春になると、甲山の付け根に一か所、桜の織りなす美しい雲がかかる。そのあたりが、神呪寺の境内だ。近くには森林公園や貯水池などもあって、西宮市民のいこいの場となっている。ぼくも子どものころ、よくハイキングに行ったものだし、今でも帰省して時間があると、散歩に足を伸ばすことがある。

神呪寺とは、お寺にしては妙な名前だ。だが、子どものころには、そんなことはまったく考えなかった。神呪寺が「神の呪いの寺」とも読めるのに気づいたのは、

いったいいつごろのことだったか。

それがいつのことであれ、ぼくは小学生のころから、「呪」という漢字を知っていたように思う。それが『常用漢字表』には含まれていないことを知ったのは、東京に出て社会人になって、出版社で高校の国語教科書編集の仕事をするようになってからのことだ。

神呪寺の前から、バス道をしばらく下っていくと、夙川という小さな川に出る。ここも、桜の名所だ。河口までは数の数キロだが、常緑の松並木と、桜の花のはなやかなピンクとの対照が、思う存分、満喫できる。もちろん、この「夙」

という漢字も常用漢字ではない。

夙川の流れを渡って数百メートル西へ行くと、もうお隣の芦屋市になる。この「芦」だって、常用漢字ではないのだ。

『常用漢字表』は、一九八一（昭和五六）年、「一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安」として制定されたものだ。収められた漢字の数は、一九四五。ここ数年かけて、文化審議会の国語分科会で見直し作業が進められてきて、字数を一九六増やした最終案が、あとは答申を待つばかりとなっている。

常用漢字に対しては、「どうしてこの漢字が含まれていないのか？」という疑問の声を、よく耳にする。たいしてむずかしいとも思えない、ありふれた漢字が入っていないことが多いのだ。ぼくも教科書編集の仕事が始めたころには、そんな思いをしばしば感じたものだ。

しかし、ぼくにとって、ありふれた漢字が、世間一般でも、ありふれたものなのか、どうか。「呪」はさすがに今回の追加文字の中にも入るくらいメジャーだが、「芦」はどうだろう？ 人名や地名以外で使い道があるかどうか。「夙」に至っては、これを常用漢字に入

れるという主張を支持してくれるのは、ぼくの故郷の住民だけかもしれない。常用漢字は一般社会での「漢字使用の目安」だから、義務教育で学習する漢字は、基本的にこの範囲内とされている。それは、高校でも踏襲されていて、常用漢字以外の漢字は、国語の授業では習わないことになっている。それでもぼくは、「呪」や「夙」や「芦」といった漢字を知っている。どこで覚えたのかと言われれば、西宮で過ごした少年時代、としか答えようがない。

ことばとは本来、生活の中で自然と習得していくものだ。漢字とて同じことで、

だから、育つ環境が異なれば、知っている漢字も異なる。ありふれた漢字が人によって違うのは、当然なのだ。特に近年、情報機器の発達によって人々が漢字に触れる機会は大幅に増えた。メールやホームページを読んでいるうちに目にする漢字の数は、膨大なものだ。その結果、ありふれた漢字の個人差は大きく拡大していることだろう。

とすれば、各人それぞれのありふれた漢字を持ち寄って「漢字使用の目安」を作り上げようとする自体に、無理

があるのではないだろうか。

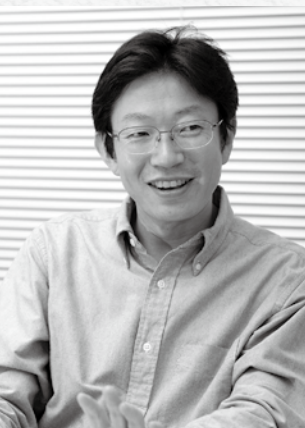
漢字とは、ある時期、組織的に学習することで、その後の習得が格段に容易となるものだ。そこに、学校での漢字教育の重要性がある。国民全体に共通する漢字学習の基礎の上に、一人ひとりの漢字体験も可能となるのだから。

個々人の「漢字体験」がますます多様化していくと予想される時代に、国民に共通するある種の漢字表が必要だとすれば、それは、学校教育と切り離しては考えられないだろう。みんながしっかりと学習していて、それを使えば確実な意思疎通ができて、さらにはその後の習得の基礎としても有効な漢字のセット。それこそが、必要なのではないだろうか。

漢字表の主人公は、ぼくたち大人ではない。それを必要としているのは、これから言語体験を積み重ねながら成長し、やがて未来の社会を支えることになる、子どもたちなのである。

円満字 二郎

1967年、兵庫県生まれ。大学卒業後、出版社で国語教科書や漢和辞典などの担当編集者として働く。2008年、退職してフリーに。『心にしみる四字熟語』（光文社新書）、『漢和辞典に訊け！』（ちくま新書）など、著書多数。2010年5月に、『常用漢字の事件簿 かい人 21 面相からミゾウユウ首相まで』（NHK 出版 生活人新書）を刊行予定。





学校図書館を 活性化しよう

来年度から完全実施される新しい学習指導要領では、「読書と情報活用」が系統的に位置づけられています。生徒たちにとっていちばん身近な「読書」の場、そして「情報センター」は、なんといっても学校図書館でしょう。学校図書館が活性化すれば、読書の習慣がつくとともに、読む・調べる・考える・書く能力も高まります。しかし、生徒が積極的に利用できるようにするには、ソフト面やハード面でさまざまな工夫が必要です。

本特集では、全国の小・中・高等学校を回って、魅力的な学校図書館づくりをされている児童文学評論家の赤木かん子さんに、「子どもが集まる学校図書館」とはどんなところかをうかがいました。そして、実際に赤木さんのアイデアで生まれ変わった図書館の事例をご紹介します。

さらに、司書教諭として教科指導と図書館の連携を研究されている塩谷京子先生には、ソフト面で、授業に生かす図書館というテーマで現場の取り組みをご紹介します。

インタビュー

子どもの集まる学校図書館って どんなところだろう？

—最近、図書館を利用する生徒が減ってきているという話をよく聞きます。どうすれば利用が増えるのでしょうか？

子どもたちが来る図書館にしたい！のならば、いちばん先にやらなくてはならないのは「分類」を考えることです。「ええっ？図書館の分類って、決まっているのがあるでしょう？」

—というあなたは図書館のことを知ってるかたですね。

そう、日本の公共図書館と学校図書館は日本十進分類法（通称NDC）という分類方法を採用しています。

でも、これはいわば倉庫用の分類で、「開架式」といって図書館員だけが書庫に入って本を探して時代にはそれでよかったのですが、「開架式」といってお客さんに分で本を眺めて探してもらう（これが今の多くの図書館のやりかたですね）には困

るところがいくつもあります。

なので、日本の公共図書館は開架式に変えたとき、いろいろな工夫を考えました。たとえば、今月は六月だから「水の本」を集めて展示しよう、というように——。

このやりかたを別置（べっち）といいます。「基本の分類だけでは困るときには、ひとつのテーマで、あちこちから本を集めてきていいよ」というやりかたです。

—中学校の図書館だったら、どんな「別置」が考えられますか？

たとえば、今年の公共図書館にはどこでも「海援隊フェア」とか「龍馬フェア」というテーブルができています。

そういうテーマで、今、中学生のために棚を作ろうと思うのなら、

- ① 現代の文学（ヤングアダルト）
- ② 危機管理

③ 心の問題

という三本の別置の棚をつくることです。

これが、群馬県富岡市立西中学校の司書・武部裕子先生が作った別置の「人気の棚」の中身です（P7）。

まずはじめに、ただ人気の本を集めただけではなくて、中学生に合う分類別置を考えて、本を集めたわけです。

①「ヤングアダルト」は、いま現在の生活を描いたブンガク、物語……。

いまだったら、その小説にケータイが出てくるか、こないかがこの分類の分かれ目ですね。

主人公が、公衆電話をかけにいくと、子

児童文学評論家 赤木かん子

赤木かん子

児童文学評論家。長野県松本市生まれ、千葉育ち。法政大学英文学科卒業。1984年に、子どものころに読んでタイトルや作者名を忘れてしまった本を探し出す「本の探偵」として本の世界にデビュー。以来、子どもの本や文化の紹介、ミステリーの紹介・書評などで活躍。また、全国の学校図書館から依頼を受け、改装の指導も行っている。4月下旬、『学校図書館のつくり方』（光村図書）を発行。

▼公式ウェブサイト
<http://www.akagikanko.jp/modules/tinyd0/>



どもは反射的に「変だな、なんでケータイ使わないんだろ」って思ってしまったから。

②「危機管理」は心的、肉体的、性的虐待。いじめやネグレクト。テーマがこれなら、実際にあった話も、誰かが作った物語もどっちもここに入れます。

③「心の問題」……これは実際にあった話だけを入れます。そう、いじめ以外の中学生の気に入りそうな癒し系の本や闘病記や伝記（特にティーンのもの——子どもは子どもに興味があるから）などの「現実にあるもの」しか入れない「リアル系」の棚ですね。

たとえば『五体不満足』（乙武洋匡著）は分類でいえば普通は「伝記」に入ります。でもそうすると、隣は「マザー・テレサ」や「徳川家康」になってしまふ……。そうすると見つけにくくなるんです。

本にはたった一つの「正しい分類記号」があるわけではありません。一冊の本にはいろいろな方向性があるでしょう？

『五体不満足』は「ハンディキャップ」に分類することもできれば「伝記」にも「生き方」にも分類できる。

どの方向が「うちの図書館では」優位かを見て、その本をどの分類に入れるかはその図書館を預かっている司書が決めるの

です。あとはその近くに「ティーンズ文庫」「電撃文庫」など「」の棚を作り、中学生用の文学コーナーは完成です。

—図書館の棚や飾りなどの改装ではどんな工夫がありますか？

愛媛県松山市立北中学校の関谷千代子先生の事例（P8）ように、自然科学の棚を整理して少数の本でカッコよく作り、居場所としての机やいすの配置に注意し、手書きの張り紙は撤去。できるなら中学生がカッコいいと思うポスターをはり、できるなら宮城県仙台市立加茂中学校の事例（P9）のようなカエル司書も採用し、毎月の飾りもできるだけする、中学生が読みたい本を入れる……などで、中学校の図書館はよみがえるはずですよ。

飾りつけを大人の女性好みにならないようにするのがコツ！

テーブルクロスも掛け、カーテン、床、いすの背もたれ、書架の色をトータルコーディネートするように考えます。

—図書館にたくさん生徒たちが集まれば、学校も変わりますよね？



生徒の心を和ませる季節の飾り付け（仙台市立加茂中学校）
©1994 NAKAJIMA CORPORATION

そうですね。先生がたも生徒さんたちも、本を手にしたときの持ちかたが変わってきますね。手慣れた、自然な持ちかたになっていきます。

毎日のように図書館にやってきて本を探して借りて読む、ということをしくり返してやっていくうちに、本の使いかたや図書館の使いかたに慣れて、無意識に動けるようになる。

特に、子どもたちの頭の中が、世界とつながっていくのが手に取るようになります。

不安そうな自信なげな顔つきだったのが、落ち着いて、図書館全体が良い活気に満ちて安定してくるのです。その安定はやがて図書館から流れ出て、学校全体に広がっていきます。

図書館を活性化することで、学校全体が知的に落ちていくんですよ。

本には人を落ち着かせ、高い所に引き上げてくれる力があるんです。

実践編

こんな工夫で、図書館が生まれ変わりました

群馬県富岡市立西中学校



生徒が読みたい本、 関心のある本を一等地に

中学生用の分類を考える

群馬県富岡市立西中学校の学校図書館の特徴は、「生徒が読みたい本は、いちばんいい位置に」である。

従来は、図書分類の基本である日本十進分類法（NDC）に従って、館内を時計回

りに「0総記」「1哲学」「9文学」という順に並べていた。しかし、そうすると入り口から入っていちばん目立つところに、歴史や社会科学といった、難しい印象を与え、生徒たちがあまり手に取らない本が並んでしまう。それがそのまま図書館のイメージとなってしまうていたのだ。

司書の武部裕子先生は、赤木かん子さんのアドバイスを受け、本の配置を一から見直し、本当に生徒にとって必要な本、読みたい本、生徒が関心のある本を入り口の正面に配置した。

この書架は、上四段には小さい本しか入らず、下の二段は大きいため、上と下には違う種類のものを入れてなくてはならない。それで、この一等地の書架の上四段に

はミステリー、ファンタジー、ヤングアダルトなどの文学系と心、性、危機管理などの本を並べ、下の二段には、占い、料理などエンターテインメントを配置した。生徒たちがよく読むヤングアダルトの横に心や性に関する本を置いておくと、自然に手に取るようになる。こうした生徒の動線に着目した配置も大切である。

生徒たちは「おもしろい本はない？」「楽しい本はない？」と武部先生に聞いてくる。従来の分類だと、書架のあちこちに散らばっていた本を、一か所に集めておけば「あの棚を見てみれば」などとアドバイスもしやすくなる。

古い本は廃棄する

こうした大規模な再配置をするにあたって、まず取り組んだのは本の選別である。本の奥付を見ながら、特に地理など情報が古くなっているものを中心に廃棄してい



ヤングアダルト、危機管理、心の問題など、中学生が読みたい本を別置

く。ただし、すぐに捨てるのではなく、一時的に空き教室を利用した書庫に保管。一年間はそうしておいて、利用がないことを確認した上で廃棄するのだ。本を捨てるという抵抗がある人が多いが、このような手法をとればスムーズに本の選別が進む。

西中学校では、蔵書のおよそ一割強に当たる千冊を廃棄。空いた書架を別室に移す

一日の改装で、わくわくする図書館に变身

愛媛県松山市立北中学校

2

ことによって、図書館の見通しがよくなるというメリットもあった。

図書委員やボランティアの生徒の手伝いで、同時に大規模な掃除や部屋の飾りつけなどの改装も実施。こうしたアイデアと努力が実って図書館に生徒が集まるようになり、貸し出し数は三年間でなんと三倍に伸びた。



この引き出しの底には、プラスチックダンボールをカットして布を貼ったものを敷いた。横幅が広いので、色をつけないともたないで、左の引き出しのクモの下には空の布を、右のサメの下には海の布を貼ったものを入れた。こういうちょっとしたポイントが全体を引き締める。



北中学校では昨年十月、自然科学系の書架に絞った図書館の改装を行った。かなり古い本も多く、生徒たちが近づくかず、活用されていないコーナーとなっていたからだ。理科の先生の協力で、現在では使えなくなっている内容の古い本を選んでもらい廃棄。その上で、今の生徒たちをひきつける楽しい本を補充した。「飛び出す絵本など、子どもっぽいという先入観をも

たれている方もいらっしやるかもしれないが、今の仕掛け絵本は非常に高度で情報も新しく、内容的にも大変充実しています」と、司書の関谷千代子先生。ビジュアル系の本の重要性を痛感している。

この図書館は、以前は家庭科室として使われていたため、書架の代わりに引き出し付きで書架としては使い勝手の悪い食器棚が使われていた。今回の改装では、この引き出しに、赤木さんのアイデアで、鉱石標本、恐竜のフィギュア、化石、万華鏡などの理科の小物を入れた。その結果、無用の長物だった引き出しは、わくわくしながら開けて楽しめる宝箱に变身。たちまち生徒の人気を集め、これまでほとんど利用者がなかった自然科学系の本も手にとって見てくれるようになった。

生徒にとってお目当ての自然科学系の書架は、図書館の一番奥にあるので、そこへ行くまでにはほかの分野の本にも興味をもちはじめ、図書館に活気がよみがえった。材料集めは別として、たった一日の改装でここまで楽しいコーナーができた上だった北中学校では、また新年度も他の分野でもチャレンジしてみ、さらに「わくわくする図書館」を作り上げていく予定だ。

全教職員が手伝い、図書館への意識高まる

宮城県仙台市立加茂中学校

3

加茂中学校の悩みは、文学を中心にした書架が縦に何列も並んで暗い部屋になっており、生徒たちがなかなか寄りつかないことだった。

この図書館を見た赤木さんは、改装にあたって五つのポイントを示した。

①現在のカウンターは図書館全体が見渡せないで移動。

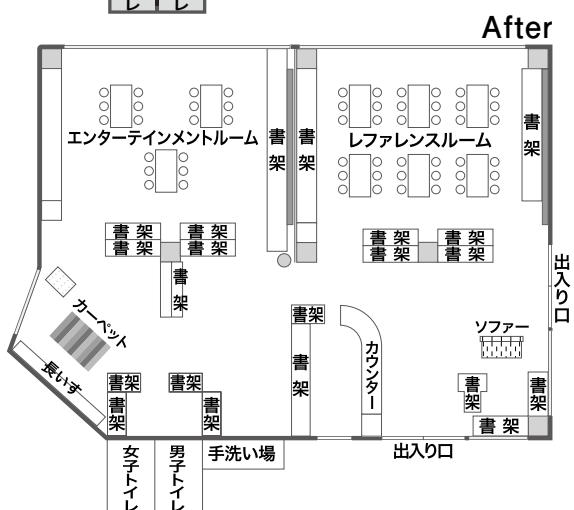
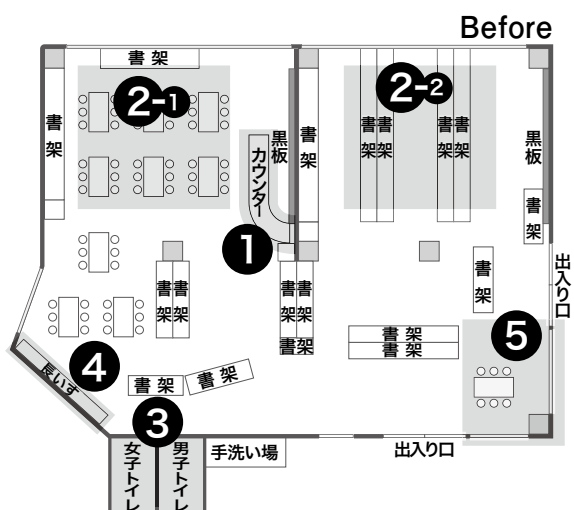
②二部屋に分かれた構造を生かして「レファレンス（勉強系）」と「エンターテインメント」に分ける。

③丸見えのトイレを目隠し。

④くつろげるコーナーを作る。

⑤居心地がよさそうなのにデッドスペースになっているところを生かす。

全教職員三十五人とボランティアの生徒



入り口のカウンターではカエル司書が出迎えます
©1994 NAKAJIMA CORPORATION

二十人、保護者十人、そのほか県内の学校司書や地元書店の人などの手伝いで、まる三日で作業は終了。改装にかかった費用は新規に購入した書籍代三十六万円と小物や消耗品費が二十万円。

全教職員が手伝ったことで意識も高まり、授業で図書館を活用することが増えた。生徒たちも、くつろげる場所として毎日大勢が集まるようになった。

※加茂中の改装の手順や方法などは、赤木さん著『学校図書館のつくり方』（光村図書）で詳しく解説しています。

生徒と図書館をつなぐために

関西大学初等部教諭 塩谷京子 しおやきょうこ



れるようになった。

その結果、図書館に資料があることと生徒が資料の使い方を知っていることで、各教科の学習がスムーズに進み、単元の目標が達成されるという成果が出てきている。もちろん、先生がたの反応も「やってよかった」と好評である。「指導案と資料をさらに整えていくことが今後の仕事です」と語ってくれた。

小学校で習得した力を生かして

堀内典子先生（静岡県磐田市立城山中学校）は、現在、磐田・袋井地区の司書教諭の有志が集まるブックプロの会を支えている。司書教諭は各学校において一人職であるため、互いの情報交換や実践共有の場を作ろうとしている訳だ。

堀内先生は、最近の生徒は本の分類など基本的なことは知っており、調べることやまとめることをいやらがらずに、おもしろ

不足していたり指導に時間がなかったりすることを理由に、先生がたが立ち止まっているのを感じていた。

萩田先生は、まず、校内の先生方に図書館を使って授業をしたい単元をあげてもらい、それをもとに年間利用計画を作成した。合わせて、単元で使いそうな本をリストアップして提供し、先生方が選んだ本を購入した。こうした手順の末、ようやく図書館に授業で使いたい資料が整うことになる。しかしながら、資料が整ったからといって、すぐに授業で使える訳ではない。生徒はどこを見てどう調べればいいかわかっていないからだ。生徒が授業で資料を使えるようにするためには、情報活用スキルの習得が必要である。

司書教諭である萩田先生には、情報活用スキルを指導する時間数がないことから、学級担任が学活、道徳、総合的な学習の時間に行うことを基本に計画を立てた。さらに、指導案と資料を添えたことで、学級担任の負担は軽減され、多くの学級で指導さ

図書館を機能させたい

こんな声が中学校の先生から聞こえてくることがある。

「小さいころは時間もあつて読書が好きなのですが、中学生になると忙しくて本を読む時間がありませんね。」

「教科指導で、図書館を使うことはほとんどありません。使いたい気持ちはあつても現実的には難しいですよ。」

読書は必要、図書館を機能させたいという思いはあるが、糸口を見出せない現実がある。この状況から何とか脱却できないものかと、司書教諭の模索が始まっている。

図書館を授業で使うためのしくみ

図書館を各教科で使うためのしくみ作りを模索しているのは静岡県袋井市立袋井中学校の萩田純子先生である。授業で図書館を使う必要性は感じているものの、資料が

がって取り組む傾向を肌で感じている。利用指導の際、少しの工夫を積み重ねることで、図書館利用が活性化するのではないかと考えている。

前任校の磐田市立豊岡中学校では、このような生徒のよさを生かしながら、中学生として必要な図書館活用の技能を習得させる利用指導を進めてきた。たとえば、以前は課題をグループに与えると一から細かい指導が必要だったが、最近では各グループで役割分担をしながら、課題を解決する過程を経験させている。与えられた課題に対して、資料がどの書架にあるのか考える子、書架へ本を探しに行く子、目次や索引を使って探す子、要約したり引用したりする子、分析する子といった具合だ。

一斉授業が多く行われる中学校でグループ学習を試みるなど、ちょっとした工夫の一端が見える。

中学校での調べ学習は図鑑から

静岡県沼津市立第五中学校の渡邊紀子先生は、「字を追っていく読書は読み物で、教科で使う本はビジュアルで」という観点で本を揃えている。

小さな積み重ねが

生徒と図書館の距離を縮める

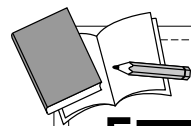
三人の司書教諭は、誰もがができる実践を積み重ねている。図書館を通して、知的にも精神的にも読むことの素晴らしさを感じるようになっていく生徒の姿が、その原動力であろう。一人の先生の図書館への導き方は一本の糸であったとしても、何人もの先生が生徒を導けば糸が集まって丈夫なひもになる。

もし、各教科の教師一人ひとりが一年間にたったの一回、生徒を図書館に連れていったとしたら、およそ月に一回のペースで生徒は授業で図書館を使う計算になる。それだけで、生徒と図書館の距離はぐっと縮まる。司書教諭の事例を参考に、一年間に一回は図書館でどんな授業ができるのかを考えてみたかどうか。こういう小さな積み重ねがあつてこそ、生徒と図書館がつながっていくのである。

塩谷京子

静岡県公立小学校教諭を経て、現在、関西大学初等部教諭。静岡県静岡市生まれ。司書教諭。著書に『しらべる力をそだてる授業！』（ポプラ社）、『学校図書館で育む情報リテラシー』（全国学校図書館協議会）など。

▼塩谷先生のホームページ
<http://homepage1.nifty.com/kyotti/>



赤木かん子の 「図書館を利用した “調べ学習”のしかた」>> 初級編

さまざまな教科で調べ学習の必要性はますます高まっています。にもかかわらず、調べかたがわからないと悩んでいる生徒を多く見かけます。ここでは、“赤木流”調べ学習のしかたを、初級編から中級、上級編と3回にわたってご紹介します。

調べ学習では、まず**テーマ**を決めなくてはなりません。

が、そのテーマは**全体の大きなテーマ**ではなく**自分の小さなテーマ**であることが大事です。

「縄文時代」や「国際理解」というテーマでは、大きすぎて、手に負えません。

なので、答えがひとつになる「**一対一**」対応になる**小さなテーマ**を考えます。

そういうテーマは**キーワードが三つ**あれば決められます。

1 たとえば、全体のテーマ、が“縄文時代”だとします。
まず大きなアーチを描きます。
このアーチが“縄文時代”です。



2 そのなかにもうひとつ、小さいアーチを描きます。
このアーチは大きいアーチである縄文時代に含まれるものでないといけません。
たとえば“暮らしの道具”にしましょう。



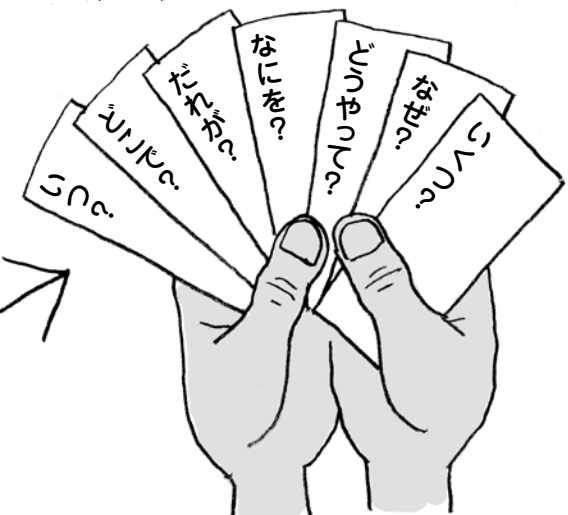
3 またアーチを描きます。
3つ目のキーワードも“暮らしの道具”のなかに含まれるものでないといけません。
ここでは“土器”にしてみましょう。



さて、これで“縄文時代”の“暮らしの道具”のなかの“土器”がテーマに決まりました。

ではその次に、**土器の何について調べようか？** を考えるときには**謎カード**を使います。このカードは全部で7枚。

この中から
1枚選んで！



このなかから、一枚、選びます。

たとえば、

“いつ？” 土器はできたのか？ 発見されたのか？

“どこで？” 発見されたのか？

“だれが？” 発見したのか？

“どうやって？” 作ったのか？

「よし、作り方にしよう！」

というわけで、この人のテーマは

縄文時代の暮らしの道具である土器はどうやって作ったのか？

に決まりました！

これを**テーマの三点決め**、といい、
このやり方を使うと、1分で自分のテーマを決められます。
これが、何かを考えるときの基本のやりかたなのです。

さて、ここでは、何も使わずに、自分の頭の中だけで考えました。
これが初級編です。

次回の中級編では「百科事典を使う調べかた」について解説します。

「書くこと」の学習の前に

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子



Q

作文の嫌いな生徒にどうして嫌いなかと聞いてみると、やはりいっぱい多いのが、
「何を書いているのか分からない」「どう書きだしているのか分からない」というものでした。
生徒が進んで書き始める工夫について教えてください。

A

原稿用紙やワークシートを渡して、さあ書きましようと言ったとき、ぜんぜん鉛筆が動かない生徒がいます。もちろん、考えているのだとは思いますが、やはりそんなときはこちらの指導が足りないときです。
「書きたい」と思えなかったこと、「何を、どのように書けばいいのか」を教師が具体的にイメージできていないことが大きな原因だと思っています。
作文や書くことの学習指導は、まず



生徒たちに何を、どう書かせたいかという教師の側の具体的なイメージが大切です。そのためには、書かせる前に教師がどのような準備をしたかが鍵となります。私たち教師は書かせる前にどのようなことをすればいいのでしょうか。
今回は具体的な例を紹介しながら、書くことの事前指導における教師の仕事をいくつか挙げてみましょう。

まずは教師が書いてみる

読むことの教材研究はよくやるのに、書くことの教材研究はどうしたらいいかということを探る人がいます。確かにどうすることが書くことの教材研究なのかわかりにくいですね。

私は、何はともあれ生徒に何かを書かせる前に「自分で書いてみる」ということを自分に課しています。課題を出された生徒の側に身を置いてみるのです。全部を完成させる必要はありませんから、小さな作文もメモもとにかく自分で書いてみます。そうして初めて、自分が出した課題の困難点や大変さ、おもしろさが自覚できます。

例えば「少年の日の思い出」を例に考えてみます。「初発の感想を書きましよう」という課題を出したとします。何のヒントも書き方も示さない場合はどんなことを頭に浮かべ、どんなことで迷うでしょうか。かわ

いそうな話だったなあ、とか、盗みを働くなんていけないことだよ、とか、エミールって嫌なヤツだったなとか、何となく切れ切れに思い浮かびます。決して何も思っていないわけではないけど、何からどんなふうに書けばいいのか戸惑ってしましますね。

そういうふうに生徒の側に身を置いてみると、書くまでに至る思考の流れがなんとなくつかめます。どこで迷うのか、なぜ困るのか。そこで、登場人物に絞ってみるのはどうだろうか、場面を区切ってみてはどうだろうか、言葉に立ち止まらせてはどうかなどの「てびき」の原型のような発想が生まれます。

例えば次のような切り口を示したら少しは書けるかも知れません。

■登場人物についての感想を書きましよう。
・僕
・エミール
・お母さん

■僕が盗みを働いた場面について

て書きましよう。

■エミールの「そうか、つまり、君はそんなにやつなんだな」という言葉についてどう思いますか。

「感じたことを自由に書きましよう」「何を書いてもいいですよ」「好きなように書きなさい」というような指示の出し方は力のある生徒には有効かもしれませんが、書くことに慣れていない、書くことが嫌いという生徒にはあまり有効ではありません。「自由」に書いていいけれど、もし参考になるのだったら次のようなことを書いてもいいですよ」と言った方が助かる生徒もたくさんいます。「夕飯、何にする?」と聞いたとき、「何でもいよ」と言われるより、「カレーが食べたいな」とか、「肉かな」とか「野菜たっぷり」と具体的に言われた方がやりやすいのと同じですね。

もちろん、初発の感想を何のために書かせるかによって、てびきも違ってくると思いますが、まずは自

書きだしの例を考える

分を書いてみよう、生徒の身になって書いてみようという発想を常にもってもらいたいと思います。そこが私たちの仕事の第一歩だと考えています。

まずは自分で書いてみるということが大事だと述べましたが、次に書きだしだけでも書いてみるということをおすすめしたいと思います。出された課題に対してどんな切り口があるかを考えるうえでも有効な教材研究です。

大村はまさんは、「修学旅行」題として次のページのような書きだし例を提示しています。「大村はま国語教室5」（筑摩書房）P269～271から抜粋。

修学旅行のような大きな出来事ではいろんなことを子どもたちは感じています。けれども書きたいことはたくさんあっても何をどう書いて

「書く」教材の取り扱い

1

はじめに

今回は「書くこと」の領域を取り上げてみました。

この領域の学習を構想するに当たって、留意しなければならないことが二つあります。一つは、「文章を綴る」ということが、生徒たちは無論のこと誰にとっても、極めて面倒な辛い作業であるということです。文章を綴る授業が生徒たちに好かれていないという現実を踏まえ、この領域の授業に対する彼らの意欲をいかに引き出すか、教師の工夫が期待される場所です。

二つは、この領域の授業の可能性と限

山梨学院短期大学教授
松野洋人

界、すなわち授業で身に付けさせることが「できること」と「できないこと」とを見定めておくということです。例えば、どんな事柄を内容として盛り込むかとか、取り上げた事柄をどういう順序に並べるかとかいうことについては指導が可能ですが、どんな言葉で表現するかということについては、基本的に一人一人の生徒がすでに獲得している語彙で表現していくしかないのです。

2

「手紙を書く」を例に

「書くこと」の能力は、生徒たちが社会人になったとき、「社会生活に必要な

を参考にしてもよいでしょう。

(3) 教材構成の可能性

第一に考えられることは、書写の指導との合体です。現在、国語に充当されている授業時数は決して潤沢ではありません。本教材についてもそれは例外ではなく、書写指導との合体は授業時数にゆとりを生み出す効果が期待できるのです。

具体的には、『中学書写・一年』（光村図書に「便せんや封筒の書き方」を学ぶことを目的とした「書写の広場（生活に生かそう）」という教材がありますので、この教材の指導との合体が最も効率的かつ効果的だと思います。

第二は、同じ第三単元内の教材で、直前に配置されている「読むこと」の教材「大人になれなかった弟たちに……」と関連させる例です。この物語は、戦争の時代を舞台として、生まれて間もない弟が栄養失調で死ぬという出来事を中心に、母の苦労や「僕」の思いが綴られた悲しい内容ですが、例えば、この作中の登場人物である「母」や「僕」に励ましの手紙を書くというものです。

生きた学習とするためには、生徒たち

国語の能力」として最も強く意識するものの一つだと思いますが、本稿では標題の教材を取り上げ、教材化や指導の可能性について考えてみることにします。

(1) まず「型」から

一年教材「手紙を書く」は、「①手紙の書き方を知ろう」「②用件を決め、手紙を書く」の二項目構成になっていますから、まず、①に示されている手紙例を用い、改まった手紙の「型」を学ばせることがよいでしょう。

「前文・主文・末文・後付け」といった全体の構成だけでなく、「頭語・結語」の選択や位置、「日付・差出人の名前・あて名」の位置、「あて名に付ける敬称」

の手紙を作者に届けるという方法も考えられますが、作者の負担を考慮すれば、家族の中の母や祖母、兄弟姉妹等に、教材文と一緒に送付するという方法などが現実的でしょう。

教材構成の例は、紙幅の関係で多くを紹介することができませんが、生徒の興味・関心、校内行事や学習の時期、学校の置かれている環境等によって様々に創意工夫が可能だと思います。

3

おわりに

携帯電話やパソコンの普及は、生徒たちの生活から多くの「肉筆で書く」という場を奪いました。この傾向は今後ますます強まるでしょうが、だからこそ学校教育では「肉筆で書く」活動を重視する必要があるのです。

手紙の種類にもよりますが、本教材の学習においては、可能なかぎり肉筆で手紙を書かせてほしいと思いますし、筆記用具についても、硬筆だけでなく、毛筆（筆ペン）で書かせることにも是非挑戦してほしいものです。

の選択など、細部にわたって基本的な「型」を確認させることが重要です。

なお、教材には縦書きの様式例しか示されていませんので、横書きの場合の様式について、必要事項の布置を確認させておく必要があるでしょう。その際、巻末資料の「いろいろな通信文」に例示されている「実用的な通信文」についても、関連して取り上げるとよいでしょう。

親しい人同士では、しばしば「型」の変形や省略等も行われますが、あくまでも基本の「型」を習得した上でのバリエーションであることを認識させておくことも重要なことです。

(2) 生きた「場づくり」を

「書くこと」の学習に対する生徒たちの抵抗感を少しでも和らげるためには、「書く」学習に対する彼らの興味や意欲を喚起する必要があります。そのためには生きた「場づくり」が欠かせません。

手紙文を書かせる際の「場づくり」で大切なことは、手紙を書く目的と差し出す相手を明確にするということです。前掲②の部分に「手紙の例」として四つの場面設定が示されていますから、それら

千七百年の時を超えて

—王羲之の臨書「発展 古典の文字を見て書く」より

二松學舎大學 非常勤講師 内田 征志

はじめに

現在、中学校国語科書写の授業の中で、古典の文字を見て書くことは、発展的な学習として必要に応じ展開されている。生徒一人ひとりが、自らの学習を深めたり広げたりすることは大切なことであり、文字に対する興味・関心を高める上でも、有効な手法であると考ええる。

本稿では、ここ数年の授業で実践してきたことを踏まえて、古典の文字を見て書く授業例を紹介する。当然、高等学校の書道科における「臨書」とは異なるので、高度にならず中学生に理解できる表現に留意した。

教材は光村図書「中学書写 二・三年」「発展 古典の文字を見て書く」を使用した。書写で学習する文字は古典の文字

とかかわりがあることを知り、文字文化や伝統に対する関心や理解を深めることが重要である。本稿では王羲之の文字を例にとったが、学校の実態に応じて、作品の全体像がわかる資料を示すなどして自由に文字を選ばせることも可能であろう。

教材「発展 古典の文字を見て書く」に取り上げられている作品は、千年以上前からの東アジア文化圏独自の伝統文化である。五十分×二回の短い授業時間ではあるが、同じ文字を書き味わうことによって、書の文化と歴史について生徒自らが興味をもって学習できるように努めたい。

指導の流れ

この学習の時期には、生徒たちは既に

目十一文字目の「流」を集字したものである。

「風」の筆使い

では、一文字目「風」の文字から詳しく見ていこう。

「風」の一画目。①紙の上部の方からごく自然に筆を入れている。起筆の方向は、ほぼ四十五度の角度で入っている。この方向を間違えると送筆を引き出す力も変わってくるので注意しなければならぬ。閉じていた筆が開き(※)筆管は、立ち気味にスツとまっすぐ下部に降りてくる。

②終筆は払うのではなく、外に張り出した力をグッと抑えながら開いた筆を静かに上部方向に抜きながら閉じていく。この呼吸を切らないように二画目へと入る。③起筆は閉じていた筆にだんだん筆圧をかけ始め、右上の転折部分へと向かっていく。④転折部分はしっかりと当たり、当たった反動を利用して⑤縦画の反りを生み出してくる。

楷書・行書、また、それらに調和する仮名の学習は終えている。それら学習した文字は、文字が発生した約二千五百年前から、中国や朝鮮、日本などの手書き文字(古典・名品)の変遷を継承して成り立っている。

また、学習してきた文字と古典や名品の文字には、点画の形や字体が違っているところがある。たとえば、ここで取り上げた「流」のつくりの部分である。このような特徴を確認しながら、先人たちの筆跡を鑑賞し、「臨書」させる。

今回は、王羲之(東晋時代)の書「蘭亭序」から「風流」の二文字(行書)を題材とした。行書は、点画のつながりが楷書と比較するとより見やすいのが特徴であることを生徒に振り返らせておきたい。

点画のつながりの呼吸やリズムは、書の性質や表情に深くかかわってくる。この王羲之の書を見ると、そのシャープさ、スマートさが伝わってくるであろう。この教材で示されている褚遂良、王鐸などの作品と比較しながら、運筆の呼吸やリズムによって、表現が多様化することを目指して学ばせたい。

古典を鑑賞するときには、細かに筆使いを見ていくのもよし、また、おおまか

⑥終筆の跳ねは、開いた筆をごく自然に上部方向に閉じながら持ち上げていつているだけである。その際、思いっきり跳ねるといようなことはしていない。この点は、はつきりと意識できるように指導していきたい。

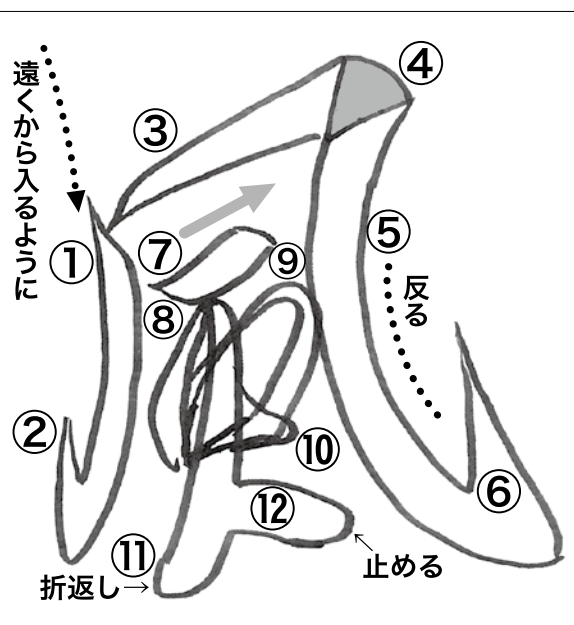
ここでの指導のポイントとは、④の転折部分が必要であることである。転折での当たりの強さが次画を呼び込むことである。二画目の跳ねの後、閉じた筆は外を空中で大きく回り、三画目に入る。

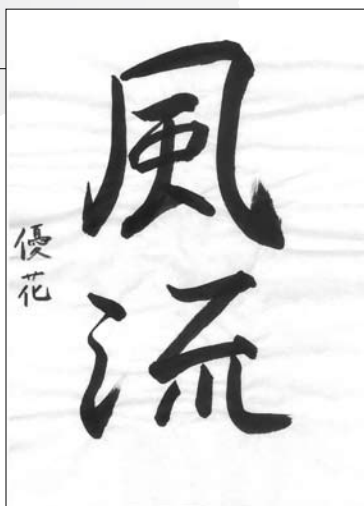
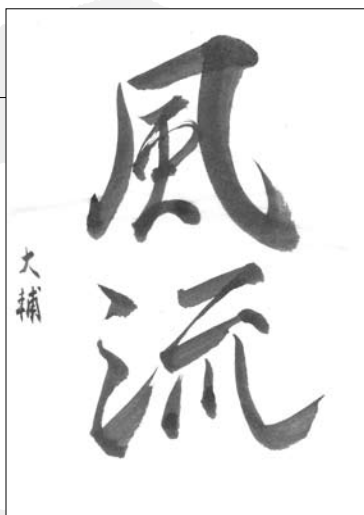
⑦「風」の三画目は、楷書などでは右上から左下へ払うよう学習しているが、ここに見られるような左から右への筆の運びについては、行書の特徴としてしっかり説明しておく。

三画目の起筆は、閉じていた筆を左下から右上へ多少反る気持ちで、終筆まで一気に筆を開き、筆を開いた上下の動きを利用して筆を閉じ、そのまま四画目に入る。⑧三画目から四画目は、呼吸のつながりが実線となって表れているところなので注意を促す。

四画目で開いた筆の力を利用し五画目の曲線に移っていく。

⑨五画目の曲線は、二画目の強い転折部分の当たりに呼応するものであることを理解させたい。





⑩六画目の横画で、いったん五画目までの緩やかな流れは止め、横への直線で締めている。流動的な流れの中でこのようなりズムの変化はアクセントともなり重要である。

六画目の終筆で開いた筆をそのまま左上部方向に吊り上げ、七画目に入る。

⑪七画目では、起筆に六画目から受けた力の余韻が働いており、それを受ける形で縦線を引いている。筆圧は起筆から終筆にかけて段々かかっていく。

⑫八画目は、ひらがなの「へ」でも書くように線一本で省略している。しかし、その線一本にも表情があり、「開↓閉↓開」の筆の上下動が見られる。

「風」の二文字だけみても、一画目から最終画まで確実に時間が流れていくことが、筆意を通してよくわかることをぜひとも生徒に伝えたい。

「流」の筆使い

次に、二文字目「流」を見てみよう。

①「流」の一画目の点。ただ漠然と点を打っていない。ひとつの点がどのような働きをしているか観察していかなければならない。

起筆で閉じていた筆が一気にパツと開

き、開いた筆をごく自然に閉じている。

②二・三画目は繋がっている。

二画目は縦画一本で省略しているが、その太細の変化は筆の上下運動によるもの。紙面に筆を高くから落とし、その反動のバネを利用し、筆を閉じながら次の点に向かってガツンと筆を開き、③更に開いた筆の弾力を利用し右上部に跳ね上げる。このような筆の開閉にリズムがないと塗り絵のようになってしまう。

④三画目、閉じていた筆

が一気に開き右上部の転

折部分でしっかりと当たり、その反動で

⑤左下への強い線を生み出している。左下での転折部分でもまた強く当たり返し、

⑥そのバネで少し力を抜き気味に右上部に運んでいる。抜いた筆は遠く回り、四画目の点へと向かう。

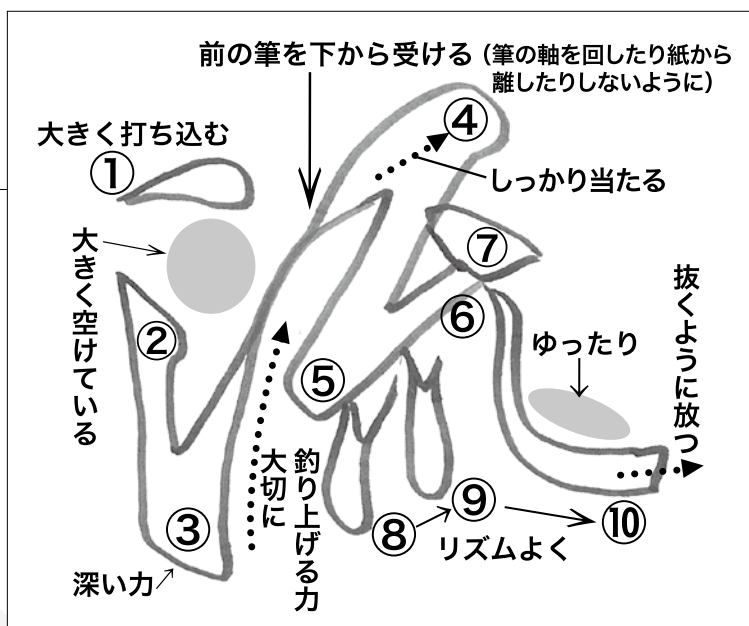
⑦この点は、外側まっすぐ、内側湾曲の姿。「閉↓開↓閉」で、⑧⑨五六画目はリズムよく「閉↓開↓閉」。⑩七画目は、

生徒や学生の反応はさまざまだが、まさにこの一言に尽きる。その筆脈を斬ってしまふと、血があふれ出し、その書自体がつくりものになってしまう。

いうまでもなく、中学校の「書写」は高等学校での「書道」と目的も方法も異なる。中学生の授業では、何もこういう説明までする必要はないが、教師がそれをわきまえていれば、「ただ昔の人の字をなぞっただけ」という授業で終わってしまうことは避けられよう。

千七百年の時を超えて

王羲之は今から千七百年以上も前に生きていた人物である。しかし、彼が「書聖」と呼ばれ、今までその作品が受け継がれてきたことを、ぜひ生徒たちに教え



曲がった後、ゆっくり抜くように放つ。このような筆のバネとその上下運動はとても重要であり、「書の生命」の一部でもあるといえよう。

筆脈を考える

二文字の関係については、一文字目の「風」がかなり右上がりの力が強くなっ

てほしい。

「王羲之ってどんな人だったんだろう」などと問いかけながら、千七百年の時を超えて、同じ筆という筆記具を使い、同じ文字を書くという「書聖との共有体験」ができる喜びをぜひ指導してほしい。

書写の発展の授業とはいえ、筆を通してその時代の感覚や空間意識の高さを学ぶことは、敏感な生徒にとって限らない可能性を引き伸ばす。実際に、すばらしい臨書をしてくる生徒には驚かされる。

古典の文字を見て書くことによって、千七百年以上も前の羲之の筆使いが、ごく自然であり、本当に正しい書であることが生徒に少しでも伝わればそれでよい。下書きの序文を一作品まで高めた羲之の姿勢、これこそ書写の原点ではないだろうか。

※「筆の開閉」

紙に対し、筆を上下に動かすこと。筆を下げたときに「開」、上げたときに「閉」の状態になる。

藤原和博 編著



未来を生き抜くための「柔らかアタマ」をつくらう!!

ニト ンレ グー 意見文 200 字

藤原流



↓
すぐに使えるワークシート付き
↓
小学校・高学年・中学生対応

杉並区立和田中学校で実践された「200字意見文」。はじめは30分使っても書けなかった生徒が、繰り返すうちに、だんだん書けるようになってくる。半年を過ぎて、15～20回を超える頃には、10分以内にできて時間を持て余す生徒も現れる。そうなるとう、国語科の時間でなくても実践可能だ。本書は、小学校高学年でも取り組める課題を含んでいる。学校でも家庭でも取り組んでみてほしい。(本書p14～15より)



藤原流
200字意見文
トレーニング
藤原和博 編著

2010年4月1日発売 ISBN978-4-89528-473-8
定価1680円(本体1600円) 本文112p B5判

教科書編集部便り

教科書と読書活動

新しい学習指導要領の「読むこと」の目標の中には、「読書を通してものの見方や考え方を広げようとする態度」(1年)、「読書を生活に役立てようとする態度」(2年)、「読書を通して自己を向上させようとする態度」(3年)と記されています。与えられたものだけを読むのではなく、生徒それぞれが自主的に読書活動を広げ深めていくことが求められているといえます。

今号のテーマである「学校図書館」は、このような読書活動の場として、生徒にとって最も身近な場といえるでしょう。

教科書で小説を学んだあとに、同じ作者の他の作品や、同様の題材を扱った他の作家の作品へ。また、説明文を学んだあとに、同じ分野や問題を扱った書物へ。特集の中で塩谷京子先生が書いていらっしゃるよう

に、できるだけ機会を設けて教室と学校図書館を結び付け、多様な本と出会わせてあげたいですね。

生徒たちがこうして広げ、深めた読書活動は、日付、作品、著者、一口感想を記すだけの簡単なものでもいいですから、ぜひ記録に残すことを勧めたいと思います。自身の読書傾向を知り、今後の読書計画を立てる手がかりとなるでしょう。

本を探し見つける喜び、実際に読み味わう喜び、読後、友人や家族と語り合う喜び。読書は、さまざまな喜びを私たちに与えてくれます。現在、編集を進めている新版教科書でも、豊かな読書生活を生徒に身につけてもらえるような様々な教材を開発中です。どうぞご期待ください。

▶ <http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>

- ✓ 毎日の授業に役立つ資料がさらに充実!
- ✓ 必要な情報にすぐにたどり着けるシンプル構成!
- ✓ 親しみやすく、わかりやすいデザイン!



必要な情報にスムーズにアクセスできるようになりました。

タイムリーな話題、注目のコンテンツなどお知らせが切り替わる楽しい画面を配置しました。

教科の部屋には、教科書の基本データ、授業に役立つ資料など、日々の実践をサポートする情報が満載!

新コーナー「シーズン・インタビュー」では、さまざまな分野で活躍されている方をゲストにお招きして、お話をうかがいます。

ホームページ「光村チャンネル」
全面リニューアルしました!